

義援金を子どもたちに

全国から寄せられた義援金を子どもたちに役立てる事ができたらと、「地域子育てネットワーク」をつくり、下記のようなイベントを計画しました。

金子みすずの世界をうたう

もりいさむコンサート

12月7日(日)10:00~11:30

場所 港島小学校体育館

参加費 無料

主催 地域子育てネットワーク

港島学童クラブ・ポートアイランド保育所父母の会

全教神戸市教職員組合・神戸子どもを守る会・地域の父母

後援 神戸市教育委員会他
(5社)

今後このような取り組みを通して、地域の子どもの健全な発達を願う人々と共に、子どもたちに良質の文化をおくることを続けたいと思っています。その事が、震災で傷ついた子どもたちの心を癒し、今後子どもたちが希望を持って暮らしていける糧になり、全国の義援金を寄せて下さった方々の励ましに応える事にもなる、でしょう。このような主旨に賛同して下さる個人、団体・また楽しい企画などがありましたら全教神戸書記局へご連絡下さい。

データーで見る被災地の現状 (現在)

仮設住宅入居世帯 (11・1) 2万6277戸

自宅外通学児童生徒(7・1)4521人

校区外通学児童生徒(7・1)3182人

県外転出児童生徒(7・1)5133人

け戻るか未定者(7・1)1555人

心のケア必要な小中学生 (7・1) 4089人

仮設での孤独死(11・8) 178人

第2号…記事のお知らせ

- * ポートアイランド仮設の子どもたち
その2…生活…p 1~2
- * 震災2年半・県教委調査より…p 3
- * 西区仮設住宅ルポより…p 4~5
- * 京都から、震災の授業報告…p 5~7
- * 義援金を子どもたちに…p 8

被災地だより

これ以上、人災による犠牲者を出さないために
強力な絆を避難所になった神戸の学校現場から全国へ

第2号 1997年11月17日発行

絆



全教神戸市教職員組合
神戸市中央区下山手通
4・13・9 中尾ビル3F
(Tel 078-391-7508)

震災後2年半、県教委は、被災地の児童生徒の心の傷は一層深くなっていると発表。(p 3…神戸新聞による)。下記の仮設の子ども達の様子からもその実態が伺えます。そして行政は一体何のためにあるのか、私たちそれぞれの立場で何をしなければならないのか、その課題を突き付けられているように思います。

3度目の夏が過ぎて
神戸市中央区ポートアイランド仮設の子どもたち
その2…生活 =どんな生活を送っているのでしょうか。(その一部です) =

家庭訪問をして

(子どもの声を聞くゆとりを)

どの家庭でも、話を聞いてほしいという願いを持っているようです。そしてその中に、今はどんなに不自由でも(友達と別れるのはいやだ)(必ず元のところへ戻って住みたい)という意気込みが感じられます。

ある小学生は、毎朝早く父親が会社へ行く車に乗って元の家へ通っています。夕方学校の前で、父親が迎えに来るのを待っていると、知らない人に「はよ、帰り」と言われるので、校門の側に小さくなって待っているという事です。中学校や高校へ行ってい



る子どもには、交通費がとてめにかかり、経済的な負担が大変な事。2Kに、年頃の娘と一緒になのでかわいそうなお話をさせている事も話してくれました。

話を聞いていて、親自身が生活に不安な思いがあるため、なかなか子どもにまで目が行き届かない現状、そして狭い住環境の中では、どうしても子ども達の生活が不規則になり、忘れ物等も多く、それが学力の不振に現われるのも無理もない事のように思いました。だからこそ今、子ども達の声を聞く教師のゆとりの大切さを痛切に感じました。

進まぬ生活再建反映

短気、粗暴、幼児化：

心の傷一層深く

阪神大震災の影響を受け、このケアを必要とする小中学生は七月一日現在で四十八十九人にのぼり、昨年同様に比べ二百七十七人増加していることが八日、兵庫県教委の調査で分かった。全体のうち四割が新たにケアが必要になったケ

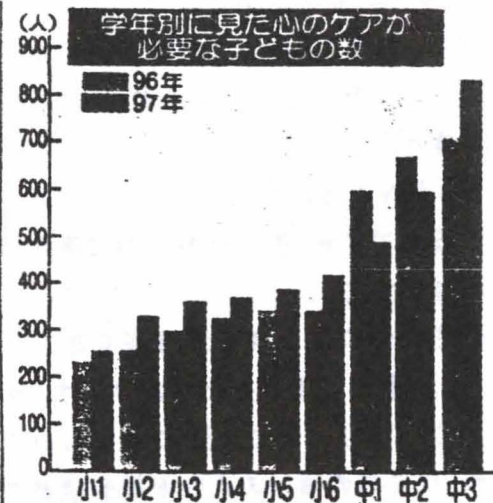
児童・生徒 県教委調査

ス、転居などに伴う二次的ストレスが引き金になっているためとみられ、震災から二年半を経て、心は癒え（や）されていらない実態が浮き彫りになった。同教委は「被災した子供たちのストレスは減少傾向にはなく、増大している最中」と

震災から2年半

「ケア必要」急増4089人

分析 「よりきめ細かなケアに力を注ぎたい」として
(31面に関連記事)
調査は県内の公立小、中学校の全千九百九十一校を対象にした。教師の目で見、被災後に頭痛や腰痛、不眠、トイレに一人で行けないなどの症状が一つでも現れている児童生徒を、心のケアを要するとしてカウントした。



比四十七人増で全生徒の二・〇六割を占めた。学年が上がるにつれてケアが必要となる児童生徒は、小学一年の約三倍に達している。教師が心のケアについて理解を深め、より十

また、震災によって転校した児童・生徒は、青森、山梨、秋田県を除く全道府県におり、五千三百三十三人を数えている。うち千五百五十五人（三〇・三％）は、兵庫県内の元の居住地に戻るが、現在地に永住するかが未定で、生活基盤が不安定な状態に置かれている実態を示している。

97.11.7
(神戸新聞より)

個人の努力も限界 …求められる公的補償

震災から二年半も経てば、幼稚園だった子どもは、もう小学二年生です。小学5年生だった子どもは、もう中学生になっているのです。元の生活に戻りたい強い願いを現実のものにするためには、個人の努力では限界の所に来ているように思いました。

「家がつぶれたら、建てればいい」と考えるのは、よっぽどお金に不自由していない人でしょう。自力再建はとても難しいのです。アパート住まいだった人は深刻です。大家がつぶれたアパートを再建するとは限りません。居住権がもうないのです。また家賃がかなり上がっています。大家によっては、収益の上がるワンルームマンションに立て替える人も多いようです。最近ようやく市営住宅が市街地にも新しく建てられはじめました。しかし、そこへ入るには保証人が要ります。近畿圏に住む人で、収入証明がいとこの事です。ある老人夫婦は、「息子は岡山だし。友達に収入証明までは出してくれない」と、私たちに語ってくれました。行政の経済的な援助「公的補償の実現」が急がれます。

行政の姿勢に転換を

仮設住宅を対象としたいろいろなイベントが行われています。しかし、「どうぞ来て下さい」もっと言えば、

「出掛けて来い」という感じです。行政がイニシアチブをとる行事はなぜか、「こういう制度を作っているから、もういいだろう」とか、「これだけ、してやってるんだ」という感じを受けます。つまり、こちらから仮設住宅に出かけていくという発想はないようです。仮設住宅に住む知り合いの老人が「毎日が日曜日だから、昼ごろに起きてずっとパジャマのままやでえ」といっていました。イベントの実行者には、こちらから仮設住宅に向いて老人がパジャマから着替えたくなるようにするという発想が必要なのではないでしょうか。（民間ボランティアのように）

震災の時のエピソードです。ある学校では、被災者が2000人で、毛布が500枚しかなかったそうです。その時の行政の対応は、「不公平になるから、次の救援物資が来るまで、配るのは見合わせよう」とのことでした。結局2000人は寒さに震えていたという事がありました。人間はそんなに愚かではありません。全部出してしまえば、一時的には取り合いになってもすぐに、困っている人、弱い人へ分け与えていったらいいと思います。「数とか公平とかにとらわれず、今できる事から始めよう」という教訓を今後生かしてほしいと思います。（次号へつづく）

（港島小 村山 勇）



西区仮設住宅ルポより

その2

ニュータウンの宅地予定地に 建てられた仮設住宅

私が仮設西神第3住宅のT夫妻を訪ねたのは97年8月13日の昼過ぎだった。市営地下鉄の終点である西神中央駅を降りると、ブレンティと呼ばれる大きなショッピング街である。いくつも建ち並ぶ高層マンションを見ながら、閑静な一戸建ての住宅地を20分程歩くと第3住宅に着く。

ここは1980年頃までは、人がほとんど足を踏み入れる事のなかった丘陵地だった。その後、大型のユンボとブルドーザーで大地は切り取られた。土砂はベルトコンベアで海へと運ばれた。「山、海へ行く」と言われる大規模な自然改造作戦である。神戸市は2つの大きなニュータウンを作り上げた。その1つがポートアイランド、六甲アイランドと名づけられた人工島であり、もう1つがここ西神ニュータウン等である。かつての丘陵は新しい「魅力的な」住宅地に変わり、十万人以上の人々が新しい暮らしを始めた。

阪神・淡路大震災で、激しく被害を受けたのは、この地域ではなかった。大規模開発と華やかなイベントの狭間で、行政からは忘れられてきた古くからの市街地、長田や兵庫、須磨等の下町が直撃された所だった。《活断層群が実在するこの地域で、将来都市直下型の大震災が発生する可能性があり、その時には……

壊滅的な被害を受ける事は間違いない」と20年も前に専門家が警告を出していたのは、その地域の事だった。何の対策も講ぜられず、忘れられていた地域だった。忘れられていたのは、そこに住む人々であった。その町で被災した人々が、移り住む事になった仮設住宅は、ニュータウンの売り出す前の宅地予定地に建てられた。西神ニュータウンに建てられた仮設住宅だけでも4000戸以上もあった。



再び忘れられた人たち

ここでこの人々は再び忘れられようとしている。住宅に足を踏み入れても、人の姿がない。ところどころに「空き家」の貼り紙がある。多くの家は人が住んでいる気配はあるのに、物音や話し声も聞こえない。出かけているのではなさそう。

「多分、皆さん小さな音でテレビをつけて、何をするでもなく、静かに時間を過ごして要るんでしょうね。」とT夫人は言う。

「顔を見かけたら、できるだけ声をかけるんですが、顔を会わすのは洗濯の時だけです。」
住宅の外に置かれた洗濯機を回しながら、簡単な言葉を交わすだけです。話すと言っても天気と洗濯の事ぐらいですね。はじめの頃はみんなが興奮状態で、頑張らなくちゃと思っていました。もうあれから2年半も経つのですね」と言うT夫人の言葉に年月の重みを感じずにはおれなかった。

入居した当初の90軒のうち、今残っているのは60数軒。2年半で仮設住宅を脱出できたのは20軒余りという事になる。その中で分かっているだけで言えば、5軒は地震の前に住んでいた元の自分の家に戻った。5軒は自分でマンションなどを購入したり、借りたりした。1軒は息子と同居することになったそう。今までに県営や市営住宅に応募して10軒が当たった。他に現在入院中が2人。Tさんも、今まで4回の募集に応募して4回とも落選だった。当たらない人の方が多いとはいえ、そのショックは大きかったとTさんは言う。

「仮設住宅の住民は、みんな祈るような気持ちで心待ちにしていたんですよ。この仮の住まいは早く出たい、そう思っています。せっかく仲良くなった人が、

当選して仮設住宅を出て行くのを送り出す気持ちは複雑なものです。」

「不思議にみんなの世話をしてくれていた自治会の役員が出ていってしまうんです。」

「とにかく不安なんです。見通しがもてない事が一番つらいんです」

T夫妻の言葉に、寂しさと不安はかくせない。

被災者の、このような不安な状況が続く限り震災は終らない。

T夫妻を仮設に訪問して、被災者が見通しと希望の持てる血の通った人間的な施策を強く思った。

私は再会を約束して、この遠くに淡路島を望む、柔らかな風の吹く小高い丘の西神第3仮設を後にした。

(植谷中 胃本 格)

京都で、阪神淡路大震災の授業に取り組まれた中西先生から、その報告が寄せられましたので紹介します。

阪神・淡路大震災の授業を終えて

京都市立 桃山東小学校
中西 美智子

クラスの子供たちといっしょに5月に、神戸へ遠足に行きました。バスの車内から、仮設住宅がわずかにみえたぐらいで、震災の傷跡はほとんど感じることはできませんでした。子供たちも、神戸の街の復興の様子のすばらしさのみを感じたように思います。しかし今なお、仮設住宅にはたくさんの人が住み、元の街へもどりたくてももどれないという人がたくさんいます。老人の孤独死の報道には、胸を痛めるものがありました。このような現実を子供たちに知らせていくことは、とても大事なことであったと考えました。

11月にある人権を学ぶ啓発学習で、この阪神大震災を教材に、何とか、子供たちに身近に感じられるような方法で学習が組めないかといろいろと資料をさがし始めました。しかし、図書館へ行っても、いろいろな本を読んでもなかなかこれといった資料に出会う事ができませんでした。

そんなある日、神戸の池見先生と、直接お話できる機会を得ました。池見先生は、実際に震災を体験され復興教員として震災にあった子供たちの教育にあたっておられた先生でした。夜、池見先生宅で見ていただいた本山第2小学校の写真やビデオ、何よりも池見先生のお話には私は心をうたれ、子供たちにこのことを伝えていきたいと、切実に感ぜずにはいられませんでした。

震災の時、今まで不登校の子供たちが学校に来てみんなにあえるという事を、どれだけ大きな事としてとらえ、喜んだかと言うこと。震災後、誰もが自然な形で困っている人を援助できたのは、戦後の民主主義の成果で有るということ等は、今も私の心の中に痛切に残っています。

授業は、社会科で4時間扱いで組みました。授業を組んでいくにあたっては、次のような事を大切にしました。

- 1、なぜ。という素朴な疑問を大切にする。
- 2、物質的な援助と共に、心のコミュニケーションが必要なことに気付かせる。
- 3、不利益を受けている人に自然に援助するのは、ごく当たり前の事としてとらえさせる。
- 4、不利益を受けている人と共に、自立への道をいっしょに考えさせる。
- 5、人間が大切にされるような社会を作っていくのに、自分にできることを考えさせる。

又、子供たちにできるだけ身近にこの学習にせまれるように、池見先生や、自分たちと同じ学年の「神戸のなおちゃん」、そして、ポートピアアイランドの村山先生と、実際に震災を体験された方々の心に寄り添って資料を選びました。

学年をいっしょに組んでいる先生がコンピューターが得意ということもあって、仮設住宅建設の資料等も、すべて手作りで作りました。最後の授業では、池見先生からの「京都のみなさんへ」という心のこもったメッセージをテープで聞き、生きていてよかったと思える神戸のまち作りに大切な事は何かについて考えました。

子供たちは、授業の中で、震災にあった人の心をととてもよく考えてくれました。そしてこの学習をして、神戸という街をととても身近に感じ、今の自分の生き方もふりかえろうとしています。震災の事を絶対に忘れない。とも言っています。立場の弱い人たちの事も、考えて行動することの大切さも感じてくれました。又、少し難しいことなのですが、自分たちの生活を包んでいる行政という物にも目を向けて、おかしいことはおかしいと言っていくことの大切さに気付きはじめています。

教師として、毎日の授業の中で、何が伝えられるのかという、原点をいつも考えながら子供たちの柔軟な思考を大事に、微力ではありますが私自身も自分にできることを追求できる教師でいたいと思っています。

子ども達の手紙より

わたしは「仮設住宅の子供達」のプリントを先生からもらってよく読んでみました。村山先生はみんなのことをよくかんがえていてすごいなと思いました。わたしは、お金を百円しかいれることができなかった。なのに、村山先生やみんなは、もっとたくさんあげてくれるのにもう思いました。わたしは村山先生みたいに、自分のことだけでなく、みんなのことをかんがえる人になりたいです。村山先生のプリントでいいかんがえができました。ありがとうございました。わたしは、もうふかふかした寝ぐさがないとき、元気のいい入浴剤をもらいたいと思います。そして、みんなのことをかんがえたいです。

中村 真由美



中西先生にお貸しした資料が、OHPの教材になって返ってきました。被災した場所と、仮設住宅の建てられた所を比べられるようになっています。「神戸のなおちゃん」の紙芝居は、横浜のボランティアの人たちが作って送って下さったものです。教案を含め、ご希望の方にお貸しします。是非ご活用ください。(全教神戸書記局・池見まで)